慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	京劇・ 梅蘭芳と日本 : 三度の訪日公演の背景とその目的
Sub Title	A study on legendary Mei-Lanfang in Japan : background and mission of his three visits to Japan
Author	袁, 英明(Yuan, Yingming)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.87 (294)- 100 (281)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム : 京劇と日本 : 梅蘭芳を中心に 開催日: 2013年12月20日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス東館6-7階 G-SEC Lab
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

京劇·梅蘭芳と日本

── 三度の訪日公演の背景とその目的 ──

袁英明

はじめに

梅蘭芳（1894-1961）は日本との関わりが深かった。氏は生涯三度にわたる訪日公演を行った。梅蘭芳を形容する言葉としては、「芸術大師」、「中国演劇の巨匠」、「世界的名優」、「卓越した女形京劇演技者」、「京劇を初めて世界に紹介した役者」、「京劇の改革者」、「演劇文化使者」、「日中文化交流の先駆」等々を上げることができる。

梅蘭芳の訪日公演は、第一回目が大正8年（1919年）、第二回目が大正13年（1924年）、第三回目が昭和31年（1956年）であった。

本稿は梅蘭芳の三度訪日公演の背景およびその目的に関する考察である。

第一回訪日公演

第1回目訪日公演は、大正8年4月21日から5月30日までの約40日間で、大倉財閥の創始者、帝国劇場の二代目会長である大倉喜八郎の招聘によるものであった。歓迎の模様はすでにその成功を暗示していた。[1]初めて中国演劇を日本に紹介し、公演が大好評を博して成功すれば、国際演劇交流に着手しようとする梅蘭芳にとって自信となるとともに、その後の国際的活動にとって幸先の良いスタートとなることを意味するものであった。

当時の背景について概観すると、梅蘭芳訪日公演の期間は中国の反日運動高揚の際中でもあった。第一次世界大戦後のパリ講和会議で、山東省の

旧ドイツ利権が中国に返還されず、日本に引き渡されようとしたことを引き金として、これに憤慨した北京の学生をはじめ、全国各地で学生運動が起こり、条約調印の拒否・親日官僚の罷免・日本製品排除を訴えて、広範な反対運動と反日運動を展開していった。これが、1919年5月4日に勃発した所謂「五・四運動」である。

さらに、この梅蘭芳訪日中の5月7日、皇太子の成人を祝う「加冠の儀」が、原敬首相や各大臣をはじめ200数名の官僚、軍人などが参列して皇居で盛大に行なわれた。[2] だが、同日、中国人留学生200名が東京で国恥記念デモを行なった。それは、日本が中国に対して二十一か条要求を5月7日の期限として突きつけたことによるものであり、中国ではこの日を「国恥記念日」とするほどの衝撃を与えたのである。[3]

このような状況下で在日中国人留学生は、梅蘭芳訪日を「旧有の封建社会」の表れと位置付けて、梅蘭芳を親日的と解釈し激しい抗議の声をもって迎えた。その異常ともいえる激しさは、新聞の報道ぶりにも示されているが、[4] 五・四運動に呼応した愛国心に燃える中国人留学生の「決死の抗争」と見れば、その意図の重要性と行動の過激性は理解できる。

梅蘭芳は、本人の意図にかかわらず、郭沫若の言う、日中文化の「劃期的な外観」の一部として、政治運動の潮流のなかに巻きこまれていった。さらにその結果、愛国心に燃える中国人留学生は梅蘭芳を親日的と解釈し、学生の一部は梅蘭芳を威嚇し公演中止を迫るという過激な行動をとるにいたった。[5] このように、梅蘭芳の訪問公演は、きわめて困難な時期に行われることになった。

然しながら、このような状況にもかかわらず、漢学者の久保天随は「その梅蘭芳が、折りもあらうに、支那に於ける排日運動漸く盛なる時に際し、反對に、態々にわが國に乗り込むといふので、先觸れも随分喧しく、滿都士女の好奇心を頗る強く刺激したが、やがて、豫告は實現せられ、帝劇に於いては、彼の得意の天女散花が第一に演ぜられた」[6] と述べているが、中国における排日運動高揚の中での来日であったため、かえって日本人の好奇心を刺激し好感を持って受け入れられたとも言えよう。

梅蘭芳一行は東京に到着すると、盛大な歓迎をうけた。その後、当時中国駐日代理公使の荘璟珂公使[7]は盛大な宴会を催し、駐日各国大使、原敬首相と日本の閣僚全員が参加した。宴会の最後に梅蘭芳が演目の名場面を演じると、会場は盛り上がり、賛美の声が絶えなかった。荘璟珂公使は斉如山に、「代理公使が開いた宴会には、官僚のトップである外務次官がちょっと参加するのが通例で、総理大臣が来るのは珍しいことであり、今回は総理大臣も自ら参加して下さり、これは史上前例のないことで、梅蘭芳は面目を施した」と話し、斉如山は「中国演劇の力とも言える」と付け加えている。[8]このように梅蘭芳に対する日本の歓迎も特別なものであった。

訪日の目的について梅蘭芳は「第一回目の訪日の目的は、経済的観点に主眼をおいたものではなく、中国の古典芸術をひろめようという私の企図の第一歩にすぎなかったのです」[9]、「一九一九年、日本東京の帝国劇場が私を日本で公演することを要請した。私は前からひとつの願望を持っていた。これは中国の古典劇を国外に紹介し、国外の観客の見方を知りたいということである。したがって、私はこの招聘を喜んで受けた。準備期間を経て、劇団を引率して日本に行った。これは私の初めての海外公演であったが、我々の演劇を東京で日本人に披露し、大変歓迎された」[10]と述べている。梅蘭芳の言葉からわかるように、梅蘭芳の訪日公演の目的は、中国の古典劇を海外に紹介し、評価を得ることであり、主眼は経済的、政治的なものではなく、芸術にあったために、排日運動や留学生の脅迫を受けたにもかかわらず、観客や関係者の要望を優先し、「国恥記念日」にも公演を続けたのである。彼の行動は、芸術には国境がなく、芸術や観客に忠実で純粋な芸術家の姿勢を表しているといえよう。

当時の劇評、報道に基づき、第一回訪日公演の意義と役割に関して言えば、梅蘭芳の日本公演は、単に中国の民族芸術を日本人に紹介するだけではなく、日中共通の儒教文化を振返り、文化交流を行なうことによって、両国国民の友好感情の絆を強化し、両国の文化に対する理解を促進したことにある。また、梅蘭芳の日本公演は、日本人の中国文化、ひいては東洋文化に対する新たな認識をもたらし、中国文化の理解を深めさせた。

第一回目の日本公演は、中国演劇を初めて中国国外へ紹介する試みとなったが、その成功により、演劇交流の道が開かれ、その後の日中演劇・文化交流の基礎となった。

また、梅蘭芳の日本公演は、留学生が揶揄するような「親日的な」行動ではなく、政治家のそれとも異なり、芸術家として、日中演劇・文化交流を意図して行なわれたものであった。彼は舞台を通して、日本人に中国文化の価値を見なおす機会を与えた。このことにより日本人は中国文化に対する認識と理解を、感動とともに深めた。したがって、梅蘭芳の訪日公演は日中親善の役割を充分に果たしたと言えよう。

第二回訪日公演

第2回訪日公演は、大正13年10月20日から11月13日までの25日間であり、東京帝国劇場、大阪宝塚大歌劇場、京都岡崎公会堂で実施された。

梅蘭芳は、来日の目的と用意してきた演目に関して、1924年10月13日付『東京朝日新聞』、同日付『国民新聞』、同15日付『都新聞』紙上において次のように語っている。「前に御厄介になった大倉さんの祝いでまた來ました……（4日間のプログラムは）何れも私が十八番としている祝いの×（筆者注：不明）です。日本の芝居は観ていても言葉の違うためしっくり飲み込めないが筋道位は判ります　今度の機会に日本の代表作品を仕組んで私共の仕事の方からの日支親善の実を挙げたいと思っています。」、「今回大倉男が米寿の祝をされるとの事で、早くから招待に預かって居ました。且帝劇にも出演したいとの希望もありまして……震災後の帝都の状態も見たいと思って居ります　舞踊を主要として居る支那でも、新しい作品は舞台で婦人問題を取扱ったものもあり、貴国の小説を翻訳したものを主として演ずるものもあります。　私も将来その方に力を致したいと思って居ります。……5年前上京して大東京の震災前を知っている私は、今日震災後の東京を見て感慨の無量さを禁じ得ません、震災当時お国に対してなした私の微意に対し、芳沢公使から懇な感謝状を送られ、かえって赤面いたしました。あの時充分の力を尽くせなかつた私は、日本の皆様にお詫びの心

持で芝居をしたい決心です……」と述べている。

上記の梅蘭芳の発言から、この第二回訪日は、第一に大倉に対する一回目の招聘と接待に対する報恩及び米寿祝い、第二に関東大震災で大きな損傷を受けた帝国劇場の改築が成り大正帝劇改築祝賀公演への積極的参加、第三に関東大震災後の復興ぶりの視察、第四に震災後の日本人に対する精神的慰問、第五に演劇交流を通しての日中親善など、梅蘭芳の当時の心情や訪日の目的などを窺うことができる。

第二回訪日公演の主な目的の1つは大倉氏の米寿祝いであった。その大倉氏の米寿の祝宴は20日午後4時から帝国劇場で催された。物々しい警戒騒ぎの中、来賓総代として招かれた加藤高明首相は「男の今回の擧式は國家並びに國際的に意義あるものであつて、男に對し祝詞を述べると共に今後益々元氣を以て日支兩國の爲めに盡さるゝを期待する」と語った。[11]

英国大使チャールズ・エリオット（Charles N E Eliot）及び徳富蘇峰が感想を述べた後、余興となり、幸田露伴作の『神風』が梅幸、幸四郎、勘彌、その他の名優によって演じられ、『源氏十二帖』のあと、梅蘭芳劇団の『麻姑献寿』が演じられ、夜11時に散会した。この夜、京浜在住の名士は約1200名が列席した。個人の米寿に首相を初め、各外国大使や各界の名士が列席することは、大倉の日本での政界、財界に及ぼす大きな影響力を表わし、加藤首相の祝辞からは、大倉に対する日中両国間における役割が期待されていることがわかる。

前述の1924年10月13日付『東京朝日新聞』、同日付『国民新聞』、同15日付『都新聞』紙上の発言中の「震後当時お国に対してなした私の微意」というのは、関東大震災の際に見舞金を寄付したことを指していると思われる。すなわち、1923年9月の関東大震災の直後、梅蘭芳は「全国芸界国際助賑大会」を開催し、義捐金を集めようと呼びかけた。北京の京劇名優達がこれに呼応して、10月2日と3日に義捐公演を行なった。その公演の純益の7095元3角という義捐金を中国外交部に託したという。梅蘭芳はこの義捐公演以外に、私的にも在華日本公使館の芳沢公使宛に書簡を添えて500元の寄付金を届け、「日本被災児童救援舞踊会」において『紅線盗盒』

を演じ、各界の要人など参加者1300余名、義捐金1万余元を集めたとのことである。

梅蘭芳の二回目訪日公演の背景について考察すると以下の通りである。

1924年に梅蘭芳が二回目の訪日を行なった時、中国国内は軍閥割拠の情勢にあり、政治状況の変化も激しかった。出発前、曹錕大総統は北京の官邸で一行の送別宴を盛大に開き、梅蘭芳に「今度日本へ行ったら君の名誉のためにも支那全体のためにも大いに努力してもらいたい……」と励ますとともに、細かい注意事項を言い渡した。[12] 中華民国の時代、個人劇団の海外公演に、大総統自ら歓送することは極めて異例のことであった。このことは、梅蘭芳の中国での地位、重要度を示すものである。しかし、1924年9月、中国では第二次奉直戦争が勃発した。三大軍閥の直隷派、奉天派、安徽派が激突し、入り乱れて戦火を交え、結局、10月23日、奉直戦争は、直隷派の軍閥の有力者である馮玉祥が起こした北京政変により終結し、曹錕は大総統職を失った。梅蘭芳が日本から帰国した時、曹錕はすでに大総統の座になかったのである。

1924年、第一次国共合作も正式に成立した。中国の共産党と国民党は、中国統一、主権回復を目標とした国民革命という国民的課題達成のために協力関係を形成した。結局、第一次国共合作は崩壊したが、両党は相互に相手党員の加入を認め、協力により国民革命の反帝・反封建の綱領と組織的基礎を確立し、革命運動は急速に発達した。

一方、日本は、第一次世界大戦中に、綿紡績業や製鉄業など重要産業への影響力の拡大、及び軍事侵攻により、中国への本格的な勢力拡張を開始し、中国を巡って、日本は、イギリス及びアメリカとの間の溝を深めた。第二次奉直戦争は日本系の奉天派軍伐と英米系の直隷派軍閥との代理戦争と言われ、中国国民は、反帝国主義、反軍閥、民族独立を求め、解放闘争を進めた。この闘争の影響は日本にも波及した。10月26日には、中国人留学生300数名が中国公使館に押し寄せ、警官隊と衝突した。[13] 要するに、今度も梅蘭芳は、1919年のように脅迫にさらされる状況にはなかったとはいえ、混乱した情勢、政情の中に来日したという点では、第一回訪日と大差

なかった。

このように二度にわたる梅蘭芳の訪日は、いずれも中国国内の抗日ナショナリズムが高揚するという困難な状況の中で挙行された。二度目の訪日の際にも、梅蘭芳は政治家でなく、芸術家として、政治とは異なる次元で国際交流、すなわち、芸術による文化交流を行い、芸術の国際性を追求しようとする気魄を示している。

公演の構成は、第一回と同様に歌舞伎との合同上演であるが、違いは、梅蘭芳が演ずる京劇が大切り（最後）になった点である。一般的に中国では、優れた役者・演目は最後に置かれるが、それを「圧軸戯」という。ここからも役者の技倆、重みが分かるのであるが、梅蘭芳の芸術が日本に十分認められ、認識されたことを示している。

また、第一回公演にはなかったこととして、日本側は、梅蘭芳の集客力を認識し、商業ベースで映画を作製し、レコードの吹き込みをした。このことは広く国民の間で梅蘭芳の芸術に対する受容性が高まったことを示している。

ここで、梅蘭芳の二回目と一回目の訪日公演の相違点と共通点を整理して見ると、次のようになる。

まず、相違点は、

① 訪日の目的が異なる。二つの祝賀、つまり、帝国劇場の改築が成った大正帝劇祝賀と大倉の米寿祝賀を主な目的とした。これは関東大震災の義捐公演、一回目の訪日公演の成功、梅蘭芳と大倉の友人関係と繋がっている。一回目の来日時の情況と違って、日本での基礎がすでに出来ている。

② 演目に周到な配慮を加えた点が異なる。演目から分かるように、内容上の気配り、梅蘭芳の演技の文武両面の発揮に重点を置いた。

③ 舞台装置が異なる。二回目は、完全な伝統的な京劇の手法、すなわち無背景、一卓二椅子で大道具の役割を果たした。一回目の時には、背景は写実的であった。これは一面では梅蘭芳の革新意識を示している。しかし、二回目は純粋な中国式を見たいという日本側の意向を受けて変えられた。

④ 演目の順番と構成が異なる。梅蘭芳の演目を最後に置く「圧軸戯」とな

り、演目は日替わりとなった。
⑤ 梅蘭芳の位置付けが異なる。梅蘭芳の芸術が日本において深く理解され、その芸術性が重視された。
　次に、共通点としては、
① 圧倒的な人気を持ち、政、官、財、民各層に歓迎された。
② 国内と日中関係の混乱した政治情勢の中に来日した。
③ 観劇入場料は空前の高値にもかかわらず、入手が困難であり、プレミアムが付き、さらに高額で売買されるほどであった。
　二回目の来日公演は、梅蘭芳の日本における爆発的な人気により、予想以上に中国の演劇文化が日本人に歓迎され、好評を受け、日本に広まった。この点において、梅蘭芳は中国文化の伝播者になったと言える。

第三回訪日公演

　第3回訪日公演は、昭和31年5月30日から7月10日までの40日間で、公演は東京歌舞伎座、福岡大博劇場、八幡製鉄体育館、名古屋市公会堂、京都南座、大阪歌舞伎座と巡回し、最後にもう一度東京歌舞伎座で上演された。
　当時の背景について触れると以下の如くである。1950年代のアメリカは台湾の蔣介石を支持し新生中国の封じ込め戦略を推進していた。日本はサンフランシスコ講和条約の締結により占領下から主権の回復をしてはいたが、アメリカの「反中（国）親台（湾）」に追随し、中国封じ込め政策に組み込まれ、1952年には台湾当局と「日華平和条約」を締結し、いわゆる「外交関係」を樹立していた。以後、1972年まで日中関係の正常化は無かった。一方中国は「対ソ一辺倒」の外交戦略を実施し、ソ連と同盟を締結していた。
　この頃の中国の国内情勢としては、1955年7月に、重工業中心の第1次5ヵ年計画が全国人民代表大会で正式に採択され、同年の農村集団化をはじめ、社会主義建設が漸進路線から急進路線へと転換し始め、本格的な社会主義国家建設に着手した。

当初、社会主義国家建設はソ連の援助を基礎としたが、1956年の「スターリン批判」、中ソの論争は、中ソ間分裂のきっかけとなった。一方、1950年代において、中国はアメリカとの対決していた。このような状況の中で、中国としては、アメリカの直接影響下にある隣国の日本を対米依存から切り離すこと、つまり日本の対米依存度を弱体化する方策を講じるために、日本との関係改善が極めて重要であった。

1950年代には、日中戦争に対する両国民にとって感情的な問題も存在した。すなわち、戦勝国か敗戦国かという歴史的認識と侵略・被侵略の立場の相違であった。国民感情として、日本には二度の原子爆弾投下によりアメリカには敗戦したが、中国大陸で中国に負けたわけではない、と解釈する日本人が多く、侵略されたり支配されたりすることの苦痛を理解できる日本人は少なかった。他方、中国人にとっては、甚大な戦死者という人的被害、砲火による厖大な量の物的被害を受けているので、勝利とはいっても、それは「惨苦の勝利」「惨勝」であった。したがって、日中両国の指導層は、其々の国民感情を無視するわけにはいかなかったのである。

1950年代の中国の対日外交政策として、関係改善を漸進方式で展開した。その一環として、周恩来総理は、民間貿易と文化交流を日中関係の改善と発展のための両輪として進めた。その意味で、文化交流は、中国にとって、対立し閉塞した日中関係を打開するための重要な外交政策の手段であった。1956年の梅蘭芳を中心とする中国京劇団の訪日公演は、このような周総理の対日外交方針の現われであった。したがって、東西冷戦の厳しい国際環境の中で日中間にあった政治的・思想的・感情的な壁と渡航手続き等の物理的な壁を越えて、梅蘭芳が率いた中国京劇団の訪日公演を実現したと言えよう。

その第三回目の梅蘭芳訪日公演の時期、日中間には次のような進展があった。つまり、日中戦争のため中断していた日中演劇交流は、新中国成立以降、民間ルートを通して交流再開の道を模索し始めた。中国人民対外文化協会と日中友好協会は、両国の文化交流を促進すべく協議を重ね、まず日本から歌舞伎団が訪中公演を行ない、続いて中国から京劇団が答礼と

して訪日公演を実現させるとの合意に達し、日中両国の文化交流の新しい一歩を歩み出した。[14]

周恩来国務院総理は、対日政策の重要方針「民間外交」、つまり日本の経済、文化、平和の民間団体等との交流を推進し、日中民間友好を促進することが急務であるとし、「梅先生（筆者注：梅蘭芳のこと）は過去2回日本を訪問して、友人が多く、日本での影響力が大きい。今回の訪日には息子の梅葆玖と娘の梅葆玥や古くからの同僚と一緒に行くべきである。」と特別に指示した。[15]

ところが、梅蘭芳は訪日について積極的ではなかった。なぜなら、日本の中国侵略を目の当たりにしたこと。8年間、口髭を蓄えて出演を拒否し、芸術家としての生涯にもたらした損失は計り知れない、ということが忘れられなかったからである。

周総理は梅蘭芳のそのような気持ちを見破って、次のように説得した。[16]

> あなたの心にはシコリがあるようだが、当然のことながら、あなたは愛国的芸術家であるので、今回日本へ演劇を持って行くことは、納得できないであろう。しかし、中国を侵略したのは一部分のファシストの反動軍閥であり、これらの人々はすでに懲罰されたことを知るべきである。今度の訪日公演は、日本国民に見せることであり、彼らも中国国民と同様に、戦争の被害者であるから、我々は日本国民に同情しなければならない。日本国民もきっと我らを歓迎するであろう。心を開いて、快く代表団を率いて行きなさい、成果を上げての凱旋帰国を期待している。

梅蘭芳は周恩来の説得を受け入れ、個人より国のため、日中関係を改善するために、三回目の訪日公演をすることにした。

また、周総理は訪日団が出発する前に、紫光閣で全員に、「今回の訪日公演は政治上大事なことであり、同時に芸術交流の重大な出来事でもある。訪日代表団の責任は中日両国人民の友好の門を叩くことである。文化と経

済はふたつの翼である。現在まず文化を先陣として道を開き、今回は必ず勝ち戦をしなければならない、続いて経済団体も赴く」と指示をした。[17]

さらに、周恩来総理は訪日京劇団全員に、「あなた達は文化使節であり、中日友好の先陣である。今回の訪日は我が国民の最大の利益のためだけではなく、日本国民の最大利益のためでもある。このことこそ、両国民の利益と平和に最も合致する芸術活動である。日本人民は戦争を呪い、平和を希求する国民であるので、必ず歓迎される」[18]と念を押して励ました。

以上から梅蘭芳の三回目訪日公演の目的は次のように推察できる。第一に梅蘭芳は個人より国の方針に従い、日中関係を改善するために実施した。第二に、中国対日政策の重要方針「民間外交」の推進、即ち日本の経済、文化、平和の民間団体などとの交流を加速させ、日中民間友好を促進するためであった。

梅蘭芳の三回目の訪日公演は表面上民間主導の事業ではあったが、実質的には政府による交流事業であった。その成功の裏には政治的な判断、とりわけ日中両国間の友好関係を築きたいという切望により実現し大成功を収めた。そこには、中国の周恩来国務院総理の対日関係を修復しなくてはならないという外交政策が働いたこと、日本社会のなかに芽生えていた対中関係緩和を探る姿勢があったのである。

どの公演も大入り満員で補助席を出すほどであった。梅蘭芳一行は広島で原爆被爆者から花束を贈られた後に、自主的に招待者にチャリティ公演も申し出た。[19]その結果、7月12日、京劇代表団と朝日新聞社の共催で、広島原爆受難者と戦災孤児を救済するための義捐公演が東京・浅草の国際劇場で追加して行われた。売り上げ金215万770円は、広島と長崎に等分して贈呈された。[20]

周恩来総理は、「今回の訪日公演は巨大な成功を収めた。芸術が日本国民の心の扉を開き、中日両国人民の友好に新しい橋をかけた」[21]と高く評価したのである。そして、梅蘭芳は周総理の期待に応え、周恩来指示の「勝ち戦」を期待に背かないで果たし、その後の日中国交回復のための地均しに大きな役割を果たしたのである。

結び

梅蘭芳の三回に渡る訪日公演は、戦前、日中関係が混乱した情勢の最中、戦後、国交が断絶していた中で行われた。ある意味では冒険的であったが、しかしそうした暗い時期であるからこそ、政治、国境を越え、芸術を通して中国の文化を日本人に理解させる梅蘭芳の行動自体は、芸術家としての面目を保ち、実質的に民間の演劇文化使者の役割を果たすこととなった。三回の訪日京劇公演ともに、日本の国民から熱狂的に受け入れられた。梅蘭芳は日中芸術文化交流の道を切り開いただけではなく、日中友好の先駆けとして後の国交回復を促進することに大きな貢献を果たしたことになった。この歴史的事実は国際関係において芸術文化交流はイデオロギー、政治を超える役割を担う大きな力を持っていることを示している。

本稿は2013年12月20日「山下輝彦教授のご退任記念シンポジウム」における発表した原稿に加筆・修正したものである。

註

1　『中央新聞』1919年4月26日付。「東京驛頭を埋めた／名優梅蘭芳の人氣」との見出しで、「支那第一の美男で支那第一の名優たる梅蘭芳夫妻其他一行30餘名は25日夜8時半東京驛に着いた歩廊（プラットホーム）には帝劇連の出迎と好事家と支那留學生とで6～700人で埋まってゐる……出迎への人々は潮の如く押寄せて下車する事が出來ない」と、その人気の高さと歓迎の様子を報じている。これらの記事を見ると、梅蘭芳を歓迎する日本国内の雰囲気と国民の関心の高さは、今日とは違うメディアの影響力を考慮するならば驚異的である。

2　『東京朝日新聞』一九一九年五月八日付。早朝からパレードを見るために、高輪御所の馬場先門から二重橋まで東京全市を挙げるほどの大群衆が集まり、二重橋付近では花電車が次から次へと現れ、人々は辻々で令嬢の配る白菊を胸に飾り、旗を持ち、夜九時ごろまで賑やかな状況であった。

3　これに呼応して中国人留学生の多くは帰国し、抗議の意思を示した。帰

国した学生の中には、第二次世界大戦後、対日関係の修復のために中日友好協会の初代名誉理事長を務めることになる郭沫若もいた。

4　『東京日日新聞』1919年5月8日付。「2000名の支那留學生帝都を騒がす」という題名の記事を載せ、当日の状況を、「中国人留学生は中国基督教会館、ドイツ大使館、ベルギー公使館、外務省、葵橋、霊南坂の留学生監督所付近にそれぞれ2、300人集合し、合計2000人に達した。ドイツ大使館付近の一団は『国恥記念』と大きく書いた長旒20枚を隠し持っていたが、警視庁巡査に発見され押収された。中国基督教会館の留学生300人は代表二名を警視庁へ派遣し、支那公使館での政談演説会の催しを要請したが、断られた。憤慨した学生600人は支那公使館へ向かったため監視の騎馬憲兵は応援を求め、直ちに出動した200人の警官と鍋島邸前で衝突し乱闘となり、学生1名が出刃包丁で巡査に切りかかるにおよんだが、逮捕者十一名を出し、結局撃退された」と報道した。

5　『東京日日新聞』、『東京朝日新聞』一九一九年五月八日付。『東京朝日新聞』の場合には、「梅蘭芳に脅迫状が舞込む　日本人のために舞臺にたつとは何事ぞやと凄文句／日支親善の額を撤して開演を續ける」との見出しで、訪日公演中の梅蘭芳に留学生から数一〇通の脅迫状が送りつけられ、「山東の利権問題が本國をますゝゝ窮地に陥れつゝある此際日本人の樂しみの爲におめゝゝ舞臺に立つとは何事ぞや本日（筆者注：七日）出演したら本國に歸つてから生命は無いものと覺悟せよ」（ママ）と書かれている。

6　漢学者の久保天随「梅蘭芳の天女散花」、『東京朝日新聞』、一九一九年五月五日付、七頁。

7　斉如山『斉如山回憶録』、北京・中国戯劇出版社、1989年、129頁には、当時の中国駐日代理公使を「柯先生」と記載し、フルネームで記してはいない。『日本外交史辞典』（山川出版社、1922年）の149頁によると、1919年4月10日から1920年10月25日までの中国駐日臨時代理公使は荘璟珂である。中国語で「珂」と「柯」は同音異字であるため、斉如山の記憶違いであることが十分考えられる。

8　同上、『斉如山回憶録』、129頁。

9　梅蘭芳著・岡崎俊夫訳『東遊記』、朝日新聞社、1959年、68頁－69頁。

10　梅蘭芳「日本人珍貴的芸術結晶 —— 歌舞伎」、『世界知識』、世界知識社、1955年第20期、26頁。

11　『東京朝日新聞』一九二四年一〇月二一日付。

12　『東京朝日新聞』一九二四年一〇月一一日付。

13　『東京朝日新聞』一九二四年一〇月二七日付。「留學生警官と大衝突　在京民國人大會を外に支那公使館の騒ぎ」には、在京中華民国留学生商

人五〇〇余名は二六日午後一時から神田中華民国基督教青年会館に集合し、現在の支那動乱について国民大会を開催し、軍閥でなく全国民の意見を代表する政治を行ない中国の安全、東洋の平和確立の決議をした後、三〇〇余名は、公使に決議文を提出し意見を聞こうと公使館を訪れたところ、公使館前で入るのを阻止した日本の私服警官他と小競り合いになり、その後警官は麹町署から多数駆けつけ、中国人五名を検束した。一方、代表四名は、私邸へ行き、阻止は公使が依頼したものかと詰寄り、答弁があいまいであるとの知らせを聞いた公使館内の学生は激昂し日本官憲にいきまくこととなり、参事官は先の学生一名と警視庁へ行き、即時釈放を迫るなど、一〇時過ぎまで不穏な状況で、麹町署からは署長以下二〇数名、憲兵隊から数名が警戒にあたった」と、写真と共に報道している。

14　1955年10月市川猿之助を中心とした歌舞伎団が訪中公演し、その答礼として1956年5月に、梅蘭芳が率いた中国京劇団の訪日公演を実現した。

15　馬少波（当時の副団長兼秘書長）「泛舟滄海　立馬昆侖―憶周恩来総理親自運籌的中国京劇代表団訪日之行」、『旅游』、総98期、1月、旅遊雑誌社、1992年、9頁。

16　福芝芳（梅蘭芳夫人）述、許姫傳記（梅夫人の福芝芳が口述、許姫伝が記述）「憶蘭芳」、許姫傳、許源來『憶芸術大師梅蘭芳』、中国戯劇出版社、1986年、4、5頁。

17　馬少波、前掲稿、9頁。

18　同上。

19　梅蘭芳著、岡崎俊夫訳、前掲書、47頁－50頁。

20　『朝日新聞』、1956年12月22日。

21　馬少波、前掲稿、10頁。